

個別学級内日記による小規模学級児童の把握

AN ASSESMENT METHOD OF SMALL-CLASSROOM SITUATIONS WITH ESSAYS LIKE DIARIES

美若 知美

Tomomi MIWAKA

はじめに

本研究は、日々の教師と児童の直接のやりとりだけでなく、それを補うものとして児童が一日の終わりに教室で書く日記（学級内個人日記）を児童の様子を理解する助けとして使うことについての実践研究である。特に年間を通しての変化や維持はグラフ化するなどの俯瞰的把握が必要だと思われる。またその中に、児童の日々のできごとの表現だけでなく自己をどのように見つめ考えているのかも見ることでさらに有用だと考えられる。

日記的な内容のものではないが、これまでに、意見文、学級通信などに関する評価法の研究としていくつかの報告がある。これらを参考に、今回の目的に合う評価方法を工夫した。

吉川・岸（2006）は、意見文を評価項目によって的確に評価するための基礎的な知見を明らかにした。小学生の意見文を適切に評価するためには、文章の構造や論点の明確さなどを評価する項目だけではなく、文章を読んだときの印象を評価する項目が必要だと提言した。また、評価項目は、指導・評価目的によって使い分ける必要があると考えた。

教師側からのものとしては、大河原・荻間澤・佐々木（1997）によって、学級通信の記事を2種類のメッセージ表現で作成した場合に、読み手が同一内容として受け取るか、2種類のメッセージ表現に対応する受け取り方をするかどうかを確認している研究がなされている。

以上のような文章評価法の研究とは別に、教室での自己肯定感に関しては、長谷川（2004）が、「自己肯定感」に対して、「学校」「家族関係」「消費文化」の諸領域に関わる諸変数の影響を検討している。小学6年生では、より強く自己肯定感を規定している変数として、「勉強の得意さ」「競争の正当性承認」「努力志向」「学校に対する肯定感」「家族関係の親密さ」などが考えられると主張している。

そして、関連するものとして、松田・岡本（2008）は、教育相談におけるオンラインカウンセリングの利用可能性に関する展望の論文の中で、書簡法とEメールとの比較を行っている。書簡法とは、文字ベースで、自分の思考や感情を表出することで、問題を整理し

ようとする手法であると述べている。内田（1990）は、書き言葉で文や文章を算出する過程について、話し言葉の算出よりいっそう自覚的で、考えていることを言葉にし、文字で綴る行為によって、書く以前に比べて何かがはっきりしたように感じることがあると主張している。

さまざまな研究がなされているが、日々の学級内日記の分析というものはなく、これまでの研究を応用して児童の学級内個人日記を分析し、学級での教育に生かすことができないだろうか考えた。今回の学級の児童は、全員ではないが何事に対してもポジティブにとらえる児童が少なく、その子どもたちはどちらかというと否定的な自己イメージをもっているのではないかという印象を持った。また、友だちに対しても、否定的に捉えて、傷つけたりからかったりする言葉かけが多いという実態もあった。さらには、直接の対話で自分を表現することが苦手だという児童もいた。全体としては、自分からどんどん話かけるのではなく、話しかけられるのを待っている児童の方が多かったため、文章や絵などで自分を表現する機会を増やすことがひとつの改善方法あるいは実態の把握法として有用ではないかと思われた。そこで直接的な働きかけや会話では難しくても文章などで表せるということをねらい、学級内日記を下校前の帰りの会に10分程度で書かせるという試みを行った。ただし、日ごとの行事等の事情によって毎日というわけにはいかないが、おおむね週3日前後を、年間を通して実践した。

この学級内日記を分析することによって、年間を通して児童の学級内の実態・変化の一端を検討すること、またこの学級内日記を用いることにどのような有用性があるかの検討が本研究の目的である。なお各日記の評価は担任自身が行うという形をとった。この理由は、吉川・岸（2006）が主張しているように、特に小学生の場合は文章から受ける印象も重要であり、さらには指導・評価目的によって評価者の共感などが反映した方が良い場合があると思われるからである。児童と担任の相互作用の場である教育現場としては、担任が日記内容から受ける印象も重要な要因だと思われる。そのような評価項目の場合は、評価を担任自身が行うので、客観性について不十分な面はあると思われる。しかし、通常は担任の受ける印象に基づい

た判断で指導を決定しているものであり、そのような担任の児童・学級理解法の枠内で理解を改善できる補助手段があれば実践的意義が大きい。日々の直接のやりとりから得た印象に基づく理解と異なる面が日記評価から出てくるならば、その思いがけない結果との相違を手がかりにして考え直していくことができるであろう。担任としての実践から得られた主観的印象による学級の実態把握と、尺度評定方式を用い、かつ時間的に後になってからの学級内日記評価を比較して、それらの一致・不一致を検討することにより、実践場面の有用性について検討を行なった。

評価項目と方法

分析を行うための評価項目の設定については、上記の文章評価などに関する文献から、今回の目的に合ったものを選択し、またそれだけでは不足すると思われるものを新たに作製するという方針で行った。このとき、項目選択と新規作製のどちらも、現職の小学校教員（筆者）、小学校教員経験（3年）と心理学研究歴（5年）の大学院生、さらに心理学研究者の3名の合議によって行い、選択した項目の表現に一部訂正なども加えた。

まず、本研究の目的から「自己イメージ」「自己表現力」「自分を伝える態度」「文章力」の4つの観点で評価項目分類を設定した。

「自己イメージの観点」では、吉川・岸（2006）が作成した「生き生きと書けている」に「活力が感じられる」を合わせて1項目としたものと、さらに6項目「前向きな表現がある」「後ろ向きな表現がある」「ポジティブな感情表現がある」「ネガティブな感情表現がある」「自分についての肯定的表現がある」「自分についての否定的表現がある」を加え、計7項目とした。

「自己表現力の観点」では、吉川・岸（2006）が作成した1項目「自分の思いが素直に表現されている」と「この子にしか書けない個性的な文章である」は、合議において、そこまでの判定ができるかという疑問が出されたので、表現を少し弱めて「その子らしい個性的な文章である」の2項目とした。

「自分を伝える態度の観点」については、「自分についての記述がある」「友だちについての記述がある」「事実（できごと）についての記述がある」の3項目とした。

「文章力の観点」では、吉川・岸（2006）が作成した3項目「言いたいことは分かる、伝わる」「わかりやすい文章である」「情景が目につく」に具体的な視点を加えた「言いたいこと（テーマ）は分かる、伝わる」「明解な文章である」「情景が目につく（様子が伝わる）」の3項目とした。

絵で表現することが得意な児童もいたため、「絵がある（絵の量）」「明るい絵がある」「暗い絵がある」「その子らしい個性的な絵がある」「人間が描いてある」「キャラクター（顔文字を含む）が描いてある」の6項目を「絵の観点」の項目と設定した。

さらに、「文章量」の項目を設定した。上記の絵の量とともに、意欲の一つの尺度に成りうると考えたためだ。

各学期10回ずつの合計30回分をランダムに選択して分析した。また、評価の順序効果が生じる可能性があると思われたため、30回の時期をランダム順で評価した。評価は0から5の6段階尺度であ

る。

以上の評価項目の各々について、時期の変化を見るためのグラフを作成し、年間の変化や変動があるかどうかを、まず統計的に（分散分析）調べ、これがあるものについて、全体的変化なのか、一時的な変動なのか（多項式対比分析）を調べた。

結果と考察

年間を通しての変動

年間を通して分散分析に有意な変化があったものは、「文章量」「絵の量」「ポジティブな感情表現がある」「ネガティブな感情表現がある」であった。

一度減少してその後増える傾向を示したのは「前向きな表現がある」と「生き生きと書けている」であった。増減増を示したのは「情景が目につく（様子が伝わる）」で、一時的な増減のみが多数あったのは「明るい絵がある」と「その子らしい個性的な文章である」「その子らしい個性的な絵がある」であった。

年間を通して有意な変化が無かった項目は、「後ろ向きな表現がある」「自分についての否定的な表現がある」のほか10項目であった。以下それぞれの項目ごとに、校内や学級内でのできごとや行事などとの関係を考察しまとめる。

文章量（図1）と絵の量（図2）

文章量は30回目（最後）の増加を別にすれば、全体として減少している傾向が見られる。文章量が減っていたということは、グラフの分析をして初めて気づいたことだった。他方絵の量は、時期が後ほど増加している傾向がある。文章量と絵の量を合わせて考えてみると、文章と絵という表現する媒体は違うが、児童が表現した量としては年間を通してほぼ一定であったと考えてよいと思われる。このことから、学級内日記の取り組みは、年間を通して動機づけが持続できたのではないかとも思われる。1学期の早い時期に文章量が多いのは、この取り組み自体が始まってすぐだということも関係しているのかもしれない。また、1学期に文章量が多かった4回の日には、どの日にも担任（筆者）以外の教員が担当している教科があった。担任（筆者）の知らないできごとを伝えようという気持ちがあったのかもしれない。2学期から3学期にかけての減少がみられること、最後に増加していることについてはまとめのところで述べる。

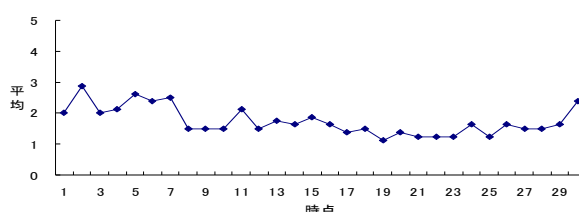


図1 文章量

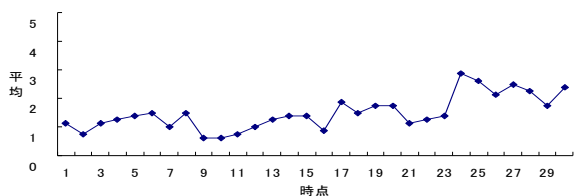


図2. 絵の量

ポジティブな感情表現 (図3)

ポジティブな感情表現があるは、一見ばらつきがあるように見えるが、1学期と2学期以降で変化が見られ、2学期以降は1学期よりも平均が上がっている。1学期は数値が低く、2学期の途中から高くなり、3学期もそのまま高くなっている。担任（筆者）も子どもたちの日々の様子から、年度の後半の方がより学校生活をたのんでいるような印象を持っており、子どもたちの日記に現れた「ポジティブさ」と対応しているようだ。日々のばらつきはあるが、運動会1週間前の11回目（9月10日）を境に、高くなっている。運動会という行事を乗り越えたことが子どもたちにとって大きな意味があることなのかもしれない。教育現場では、「行事が子どもを育てる」ということを聞くことがある。大きな行事との関係についてはまとめのところで述べる。

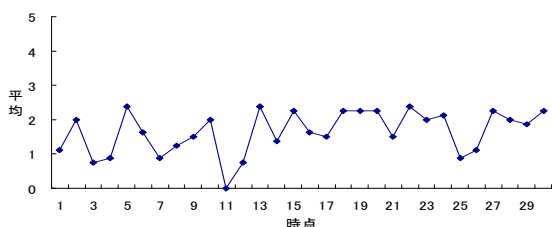


図3. ポジティブな感情表現

ネガティブな感情表現 (図4)

ネガティブな感情表現があるは、全体的に低いのだが、1学期に多少増加し、2学期に減少し、3学期また少し増加している傾向がある。これらのことを合わせて考えてみると、1学期はポジティブな感情が低く、ネガティブな感情が増加している。しかし2学期は、ポジティブな感情が高くなり、ネガティブな感情が減少している。他方3学期は、ポジティブな感情が高いまま、ネガティブな感情が増加しており、ポジティブとネガティブの共存が見られた。学級内のポジティブな面が保たれつつも、卒業に向けての個人内の不安やさびしさが増えたためではないかと思われる。担任（筆者）としては、子どもたちの日々の会話や、何かを始めたり取り組んだりしている途中のつぶやきなどから、漠然としたネガティブな印象を持っていたので、年間を通して全体的に低いというのが驚きでもあった。

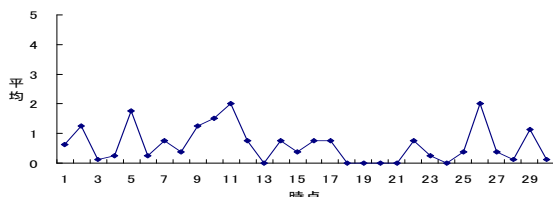


図4. ネガティブな感情表現

前向きな表現がある (図5)

前向きな表現があるは、全体的に数値は低い、2学期に一度減

少して3学期に増える傾向がみられる。特に数値が高くなっている3日間から考えてみると、クラブ活動や運動会と卒業式の一週間前と何かのできごとや行事の前に書いた日が高くなりやすいと思われる。大きな行事との関係や、2学期に一度減少して3学期に増えることについてはまとめのところで述べる。

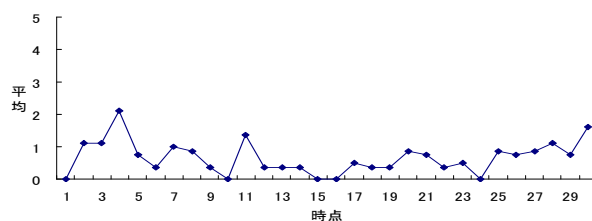


図5. 前向きな表現がある

後ろ向きな表現がある (図6)

後ろ向きな表現があるは、年間を通して変化がなく、数値そのものがとても低く30回のうち27回が0だった。「ネガティブな感情表現」は2学期に減少し、3学期に少し増加しているが、それが「後ろ向きな表現」としては表れていない。ネガティブな感情が書かれていても、だからといって前向きな態度が低下するわけではなく、また後ろ向きになるとも限らないということである。日常の会話に出てくるネガティブな感情表現も含め、感情面だけで児童の態度や行動を解釈してはいけないことを明確に示している。

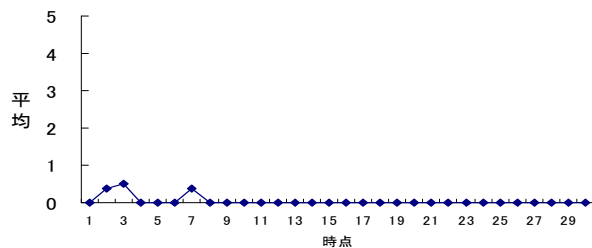


図6. 後ろ向きな表現がある

生き生きと書けている (図7)

生き生きと書けているは、取り組みのスタートのときがとても高い。1学期より2学期が下がり、3学期はさらに下がる傾向がみられるが、最後に始めと同じぐらいまで上がっている。特に数値が高くなっているのは、交通安全教室があった日や担任（筆者）と腕相撲をした日、理科で実験をした日で、行事だけでなく自分たちの中でのちょっとしたできごとがある日に数値が高くなっているように思われる。卒業式前の最後2回も続けて高くなっている。この項目で特に高くなっている日は、子どもたちの行動から観察できる「生き生きとした感じ」と日記の文章がよく対応していた。

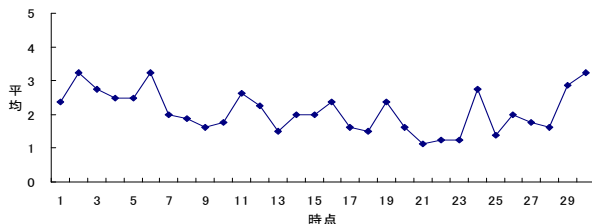


図7. 生き生きと書けている

情景が目浮かぶ（様子が伝わる）（図 8）

情景が目浮かぶ（様子が伝わる）は、2 学期中旬から 3 学期中旬にかけて下がっている。このグラフの減少の仕方は、文章量のグラフの減少の仕方とよく似ている。とても高かった日は縦割り班活動があった日だ。同学年のいつもの同じメンバーではなく、異学年の集団となる縦割り班は、子どもたちにとって新鮮な活動の場となる。リーダーとしての責任もあり、またほめてもらえる機会でもある。何より子どもたち自身が縦割り班の活動そのものを楽しんでいるのでこの日の数値が高いのかもしれない。最後も数値がとても高くなっている。

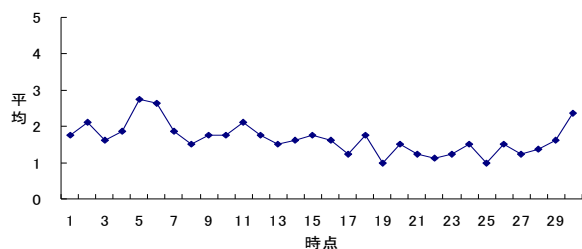


図 8. 情景が目浮かぶ（様子が伝わる）

その子らしい個性的な文章である（図 9）

その子らしい個性的な文章であるは、最後の日以外で数値が高い 4 日間、交通安全教室、児童集会、地区文化祭、やさいも集会とそれぞれの日に何かのできごとや行事があり、そのことを終えてから日記を書いている。その児童なりの個性的な文章表現は、これから起こるであろうできごとを書くときよりも、実際に自分が体験したことやそのときの気持ちを思い出しながら書いたときに多く見られるようだ。

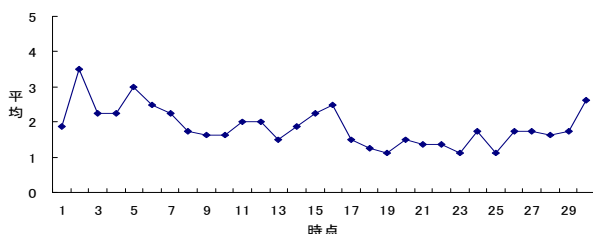


図 9. その子らしい個性的な文章

明るい絵がある（図 10）

明るい絵があるは、全体的には、だんだんと高くなっているが、とても低いところと急に上がっているところがある。「明るい絵」としては数値が低くても、その他の文章にかかわる項目で特に低くなっている訳ではない。グラフの最後が高くなっている。

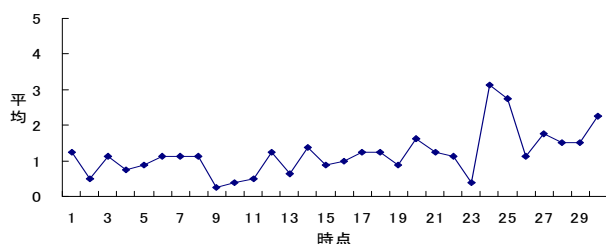


図 10. 明るい絵がある

その子らしい個性的な絵がある（図 11）

その子らしい個性的な絵があるは、「明るい絵」が少なかった日は、「個性的な絵」も少なかった。同じく「明るい絵」が多くなった日は、「個性的な絵」も多くなっている。絵で表現しやすいできごとがあったときには、絵の量が増えていると思われる。グラフの最後が高くなっている。

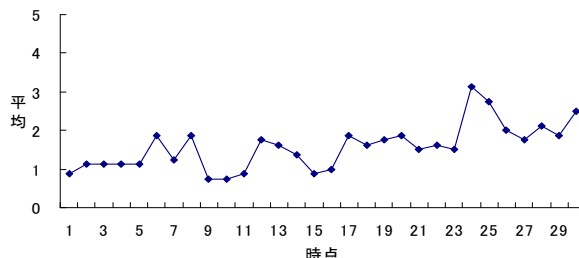


図 11. その子らしい個性的な絵がある

自分についての否定的な表現がある（図 12）

自分についての否定的な表現があるは、年間を通して変化がなく、数値そのものがとても低く 30 回のうち 25 回が 0 だった。「後ろ向きな表現」と同様に、「ネガティブな感情」は持ちつつも、自己否定のことがほとんどなかったということだ。この 2 つの項目の結果を見て筆者は驚きを感じた。筆者が担任として受けた子どもたちの印象と一番かけ離れていた部分かもしれない。子どもたちの表情や口にすることは、子どもたちのことを理解するためにはとても大切な手がかりだということ間違いないと思うのだが、それにも表れない、あるいは表せない感情もあったのではないだろうか。また、「後ろ向きと前向き」や「否定的と肯定的」は常に相反するわけではなく、前向きではないけれど後ろ向きというわけでもない、肯定的ではないけれど否定的というわけでもないという視点が筆者が担任として子どもたちを見ていくときになかったといえる。経験の浅い教員は特に、児童のネガティブな感情表現に対して、自分の指導力を疑ったり、児童と良い関係ができていないと解釈して、強いストレスを感じたりすることが多いと思われる。このように複雑な側面を新任のうちに把握するためにも、学級内日記の評定を用いることも有用ではないだろうか。

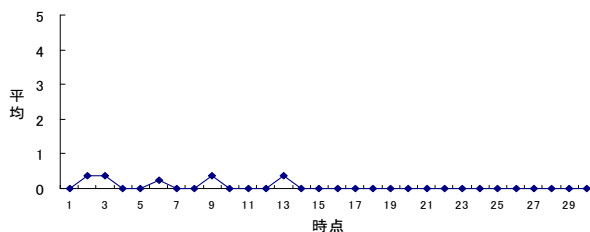


図 12. 自分についての否定的な表現がある

まとめ

卒業式前（3 月 17 日）について

最後の 30 回目は、特別な意味があると注目すべきところだ。「前向きな表現がある」「生き生きと書けている」「様子が伝わる」「個性的な文章である」「明るい絵がある」「個性的な絵がある」「文章量」

のグラフで数値が急に高くなっている。

6年生にとって、卒業は小学校生活のとても大きなゴールだ。そして、そのゴールは、中学校のスタートにつながるものでもある。あと少しの小学校生活を楽しもうという気持ちや、今までのことを懐かしく思い出す気持ち、そしてこれからの中学校生活への希望や不安な気持ちを一人ひとりがその子なりの感じ方をしていたのだろう。そのことを、「前向きな表現」や「生き生きとした」書き方、「個性的な文章」で表し、「文章量」の増加となったのだろう。3学期終わりごろの「ポジティブな感情表現」と「ネガティブな感情表現」の増減からも、どちらの感情も共存していたことがわかる。

6年生という学年は、小学校生活全ての終わりである卒業式に向けて学級を作り上げることができる。経験の浅い教員が6年生を担当するときには、4月の学年のスタートのときから卒業式を学級の子どもたち全員に共通するとても明確なゴールと位置づけて、1年間の学級経営を考えることが必要となるだろう。

一年間を通して

複数のグラフに、数値が1学期から2学期前半にかけて、また、2学期後半から3学期にかけて、低いまま下がっているものがあった。この結果は、長期休暇を挟んだ2つの学期を通してグラフの示す傾向が変わらなかったということを意味している。教師は、3学期制や2学期制で動いており、それぞれの学期ごとで区切って捉えやすい。しかしグラフから子どもたちの気持ちは学期ごとに切れてはいないことがわかる。1年間の学級経営を考えていく中で、それぞれの学期の始めに子どもたちの状態をどのように把握しているのかがとても大切になってくると思われる。ここで、担任である教師と子どもたちとのズレが生じ、そのズレが大きければ大きいほど良い関係を築くことが難しくなるであろう。

また、複数のグラフに見られる2学期から3学期にかけての数値の低さや下がっている様子は、担任をしていて感じることもある年間を通した学級経営の中たるみ状態の時期と対応している。大きな学校行事がある2学期だが、目先の行事をこなしていくことで日々の学級での暮らしがおろそかになりがちだ。そういうときこそ、その学級独自の取り組みや、担任の個性を生かした関わり方を考えていく必要がいののではないだろうか。

大きな行事

年間を通じていろいろな学校行事がある。子どもたちの気持ちの変化ということを考えたとき、筆者は今まで、その行事の本番に近づくにつれて徐々に気持ちが盛り上がっていくのだろうと捉えていた。「ネガティブな感情表現」と「ポジティブな感情表現」のグラフから、行事の直前よりも1週間ぐらい前の時期がストレスの山場で気持ちの揺れもピークなのかもしれないと思われる。学級担任は、大きな行事の1週間ぐらい前を1年間の学級経営の中で重要なポイントとして意識しておく必要があるのではないだろうか。そして、新任の教員が高学年の担任をする場合、校内のできごとや行事に関しては子どもたちの方が経験の積み重ねがあることをふまえた上で学級を作っていかなければならないだろう。

担任の印象と児童の表現行動

教師が子どもたちから受ける印象はとても大切だ。教師はだれもが、自分自身が担任している子どもたちから受けた印象をもとに指導を組み立てており、今回の学級内日記の取り組みもその一つだ。今回のグラフの分析をしていて、筆者自身が改めて気づかされたことがある。それは、長く経験を積み重ねてきた教師でも、担任として子どもたちのことを必ずしも全て理解できているわけではないし、担任が子どもたちから受ける印象はとても主観的で、その印象だけで子どもたちを捉えるということは危うい側面もあるということだ。子どもたちから受けた主観的な印象を心の中に持ちながらも、子どもたちの言動などの表出している部分と内面の違いを常に意識することができればよいのだが。この違いを把握するためにも、本研究の方法は有用ではないだろうか。

今回は、小規模校の少人数学級における1年間のデータによる研究だが、今後は多様なタイプの学級や、複数の担任によるデータの収集、短期間でのデータ収集などでより一般性の高いものにしていくこともできるであろう。また、教師が書いたコメントの分析も行い相互の関係性を研究することも有効だと考えられる。

おわりに

本研究を通して、筆者自身が教師として今までやってきたことは、間違っただけではなかったのだという確信や、新たな気づき、そして今後さらに取り組んでいきたい課題も見つけることができた。教師という仕事に終わりはないと感じている。これからも、人と謙虚に向き合う心をベースとして、子どもたちとつながっていきたい。そして、多くの人たちとの出会いに感謝し、自分自身も人として成長し続けたいと思っている。

引用文献表

- 長谷川裕 (2004). 自己肯定感を規定するものー21世紀初頭の教育における競争と子ども・若者 琉球大学教育学部紀要, 64, 111-131
- 松田英子・岡本 悠 (2008). 教育相談におけるオンラインカウンセリングの利用可能性に関する展望 メディア教育研究, 5 (2), 111-120
- 長澤泰子・太田真紀 (2005). 教育臨床におけるコミュニケーション分析の試みⅢー教師の内省が子どもの行動に及ぼす影響ー 日本橋学館大学紀要, 4, 3-14
- 岡本 悠・松田英子 (2008). ビデオチャットカウンセリングの有用性に関する検討ー対面カウンセリング及び E メールカウンセリングとの比較ー メディア教育研究, 4 (2), 91-98
- 大河原清・荻間澤勇人・佐々木佳史 (1997). 学級通信記事における2種類のメッセージ表現に対する学習者の反応 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, 7, 251-269
- 須田康之・水野 考・藤井宣彰・西本裕輝・高旗浩志 (2007). 学級規模が授業と学力に与える影響:全国4県児童生徒調査から 北海道教育大学紀要, 58 (1), 249-264
- 内田伸子 (1990). 発達心理学 ー言語の獲得と教育ー 岩波書店
- 吉川愛弓・岸 学 (2006). 作文の評価項目に関する検討ー意見文の評価は何に影響を受けるのかー 東京学芸大学紀要, 57, 93-102

謝辞

本論文を執筆するにあたり、丁寧にご指導くださいました妻藤真彦先生、先生のご指導のもと、分析・論文執筆ととても充実した時間を過ごさせていただきましたことを心より深く感謝いたします。

また、本研究におけるデータ収集にあたり、津山市立広野小学校の校長先生、同小学校の諸先生方、そして何より、長期にわたり個人日記を貸していただいた8名の児童と、ご理解いただいた保護者の皆様に心より感謝申し上げ、重ねてお礼申し上げます。

大学院のご講義でいろいろな分野の先行研究を教えていただいた廣瀬聡弥先生、本研究のきっかけとなるご助言をいただいた安田純先生、論文執筆中、いつも温かい言葉をかけていただいた津々清美さん、塚本瑠奈さん、中間発表前に貴重な意見をいただいた学部4年生の皆さんにもお礼申し上げます。ありがとうございました。

最後に、大学院で学びたいという筆者の気持ちを理解し、見守り、応援してくれた家族に深く感謝します。